



文 ヴォルフ・ライザー 写真 サイモン・ノーフォーク

STONY SILENCE

王墓を守る神々の顔

ネムрут・ダーにドイツ人技師が足を踏み入れたのは1881年のことだった。この山は当時と同じように、今日も秘密を明かすことを拒んでいる。これは古の誇大妄想の記念碑であったのか、あるいは、多文化主義の謳歌の表れであったのか。2000年前につくられたこの墳墓は、今なお謎に包まれている。

この墳墓の東、西、北側に配された土壇の周辺は、あたかもチェスを楽しんでいたふたりの偉大な太古の神が、突然、ゲーム盤をひっくり返したかのように雑然としている。



1881年のうだるように暑い夏、ドイツ人の道路技師カール・ゼシユターは南アナトリアにいた。新しい道路建設の可能性を調査することが滞在の目的だ。当時のベルセポリスとエーゲ海を結ぶ古い石畳の道を、新しく作り直す必要に迫られていたのだ。だが、ゼシユターの心を日々とらえてやまなかったものは、キャンプから見える風景だった。そこには標高2134メートルの巨大な円錐形のネムレット山がそびえ立っていた。この山の上に奇妙な巨像があるという話は、地元農民や山羊飼いからく聞いていた。ゼシユターはある朝、ラバに乗って出発し、曲がりくねった長い道のりをたどった。まずユーフラテス川に沿って進んだ

後、香り漂う松林やイチジク林、オレアンダーの茂み、オリブ園、ブドウ園などを通り過ぎた。まもなくして、道はとても危険な上り坂となり、ラバのひづめの音が奏でる不規則なリズムがだらだらと流れゆく時を刻んだ。そしてついにゼシユターは、数百万のこぶし大の石でできた大陵墓を目の当たりにする。彼は驚きのあまり、ラバから落ちそうになった。この墳墓の東、西、北側に配された土壇の周辺は、あたかもチェスを楽しんでいたふたりの偉大な太古の神が、突然、ゲーム盤をひっくり返したかのように雑然としている。目の前には、青白い石灰華（トウフア）や緑がかった砂岩でつくられた像の数々が立っている。胴体部が石の台座の上に収まっ

ているものもある。転がり落ちた頭部の数々は唇の形をしっかりと保ち、先の尖ったヒッタイト様式の頭部飾りを見せつけながら、雨風の浸食や、地震、盗掘などによってテラスのあちこちに散乱した状態だった。沈みかけた午後の日差しのおかげで、このような像の数々が不思議な美しさを湛え、無表情のままに遠方を見つめている。そのすぐ横にゼシユターが見たものは、周囲に占星術のサインがちりばめられ、胸元に三日月をあしらった威風堂々たる獅子のレリーフだった。また、埃と砂利の間に、険しい表情をした鷹の頭も突き出ている。ギリシャ語で刻まれた石板がたぐさんあり、ゼシユターはモーゼの十戒を思い起こした。言葉なくラバの背にまたがりながら、彼はそれぞれの土壇にある神々の像のなからゼウス、アポロン、ヘラクレスの姿を見出した。キャンプに戻る道のりで、彼はふと思いついた。古代の祭儀が執り行われていたであろうこの墳墓の発見は、一大センセーションを巻き起こすに違いない。と、実際、ネムレット・ダーはほどなくして、世界の8番目の不思議として数えられることになった。

翌年、プロイセン王立科学アカデミーはカール・ゼシユターを再び小アジアに送った。彼に同行したのは考古学者のオットー・プッフシュタインだ。ふたりはトルコ人の同僚と共に、修復、再構築、系統分類、調査、解釈評価などを丹念に進めた。そしてほどなく、この壮観な野外デイスブレイの立案者を割り出したのだ。ネムレット山のこの一大プロジェクトは、5センチ大のギリシャ文字で石板に詳述されており、これを残したのはコンマゲネ王、アンティオコス1世だった。これはまさに、パワールポイントで作成されたブレゼンテーション文書の古代遺跡バージョンではないか。

アンティオコス1世は紀元前70年から38年に、ヘレニズム時代のスイスともいえる豊潤で平穏な小さな緩衝地域を支配していた。ここは、ベルシヤとローマ帝国の中間に位置し、常に不安定な境界地帯だった。星々がアンティオコス1世の味方をしたと思われる理由は、彼に権力のバランスを図る能力があり、政治的・外交的な手腕があつただけに留まらない。アタチュルク・ダムの人造湖の下に眠るコンマゲネの都サモサタは、当時最も重要視されていた通商・軍事ルートの合流地点に位置していた。ダマスカス、アルメニア、黒海、バルミラから訪れる隊商や貨物船は、絶え間なく

鎮座し、またマケドニアとベルシヤに起源を持つ王の系譜が刻まれたレリーフも見られる。山の頂は、大事業のもと小石に砕かれ、これによって聖廟の土壇が築かれていた。ユネスコは1987年に、ネムレット・ダーを世界遺産に指定した。

アンティオコス1世の墓は、当時の宗教的・政治的な権力を反映した半伝説的な系譜を添えながら、コンマゲネ王国（紀元前163～西暦72年）の偉大な支配者を祝福している。ギリシャの神々の巨像は、鷹と獅子の石像の間に



(右) 埃だらけの曲がりくねった
25分の厳しい道のりを
たどると、ネムルト・ダーの
山頂に横たわる円錐状の
霊廟に行き着く。



げる神殿をネムルト山に建設する理由は十分にあつたといえる。現存する3つのレリーフには、アンティオコス1世自身はさまざま神々と握手を交わす場面が表現されており、彼は人間世界とオリンポス山の永遠の友好を示す確たる証を後世に残したのだ。東側と西側の土壇にある石の台座には237行の勅令が刻まれているが、その36行目にアンティオコス1世は次のような言葉を残している。

「将来を慮り、この聖なる墳墓の礎を築く……実りある晩節に至ったわが人格の外形は幸いにも保全され、神の恩寵を受ける魂がゼウスの天の王座のもとに送り届けられた後、永劫の眠りに就く」

1951年、ドイツの考古学

者フリードリッヒ・カール・デルナーは、この巨大墓地の徹底的な調査を開始した。この調査によつて、王に仕える建築家たちがまずネムルト山の頂上部分を細かく砕き、これらの小石を使つて山頂から20メートル下の山の中核部を、三方から取り巻くようにして、丹念に土壇をつくり上げていたことが判明した。

永遠の安眠を欲した王の希望に反し、学究的な好奇心は調査をさらに推し進めた。王はここにいるのだらうか。どのような埋葬品を望んだのだらうか。そして、彼が守り続けた大いなる秘密とは、何だったのだらうか。彼はどのような秘密が存在するといふ文面を残している。「大王、神、正しきものは……常に法を残している。その

法のもとで、不滅のメッセージを聖なる記念碑に託す」。小石の山の下に、平和と繁栄と不滅を示す神譲りの公式が隠されていることはあり得るのだろうか。

1950年代から1960年代に、財宝を探し求めるデルナーとアメリカ人の同僚たちは数多くのトンネルを掘り、それらを確保しようと試みたが、岩盤にはばまれて、なかなか奥に進むことができず、諦めざるを得なかった。ごく最近探査許可を得た探検隊は、油圧式クレーン、3Dスキャナー、圧力計、最新のレーザー装置などを使っているが、何ら新しい成果を生み出してはいない。岩盤は沈黙を守つたままだ。

現在、ここを訪れる旅行者たちは、キャプタの町から早朝

に車を走らせ、アタチュルク・ダム湖の水にまはやく反射する緑色のミナレットを通り過ぎる。そして曲がりくねった道に入り、アルペンスキーの走路のような急勾配のらせん状の傾斜を上っていく。50キロほど進むと、ネムルト・ダー国立公園の入口だ。ここにはクルド人の売店がいくつもあり、果物、平たいパン、羊乳のチーズ、熱いお茶、ヨーグルト、トルコの酒ラキなどを売っている。ここから3面のテラスまでは徒歩でおおよそ25分かかる。2000年以上前に、アンティオコス1世はその配下に命じ、これと全く同じ道のりで月2回の聖なる行進を行っていた。頂上にたどり着いた農民や貴族たちには、見返りとして僧侶から食料やワインが与え

られていた。そして、供犠、報恩、崇拜、社交、祈り、祝祭の場が持たれた。

今日は当時に比べてずっと静かで平穏だが、遠い過去と現在にまたがる親和性に目を向けた時——アポロン、ゼウス、ヘラクレスのどつしりとした頭部と台座の間に立ち、石の獅子と鷲を脇に促えた古代の供犠祭壇の彼方から昇りゆく日の出を見た時に、信じ難いほどの高揚感をもたらされるのだ。そこには、自らの世界に浸り切つて神祕の世界に身を委ね、想像力を羽ばたかせる自由がある。同時に、彫像が私たちに記念碑について思いを巡らすことをうながし、寛容と調和へと導く。ネムルト・ダーには知的な和解の精神が漂っているのだ。

◆